

〇〇してみました世界のフィールド

ユートピアの廃墟

おうじ けんた
王寺 賢太
東京大学准教授



サン・イグナシオ・ミニの聖堂跡 (撮影: 王寺希奈, 二〇一八年)
「廃墟を訪ねてきました」

かつて30にものぼる布教区が置かれたその土地は、いまや訪れる人影もまばらで往時の賑わいは見る影もない。「改稿」に秘められた歴史の舞台裏に思いをよせ、学者は異郷へと足を延ばした。

布教区の廃墟を訪ねる

アルゼンチンの東北に「ミシオネス」とよばれる地方がある。西を巴拉ナ川対岸のパラグアイと接し、北はイグアスの滝までブラジル領に食い込んだ僻地である。ブエノスアイレスからこの地方の中心都市ポサダに飛び、そこからサンタ・アナ、ロレト、サン・イグナシオ・ミニと三つの集落を周遊したのはもう二年も前の八月のことだ。



サンタ・アナの聖堂跡 (2018年)

★
アルゼンチン、
ミシオネス州

このミシオネス地方を中心に、パラグアイとブラジルに広がる領域には、一七〇八世紀、最盛期にはおよそ三〇の「布教区」と総人口四万のグアラ二人の「新信徒たち」を教え、近世カトリック宣教の最大の成果として、ヨーロッパで毀誉褒貶の激しい議論的になった、イエズス会パラグアイ・ミッションがあった。もともともそのミッションも、一八世紀後半、大西洋世界に革命の時代到来を告げた七年戦争の時期に、イエズス会がポルトガル、スペインの両王国から相次いで追放され、あえなく消滅してしまふ。近世フランス思想史を専門とするわたしがわざわざミシオネスまで足を延ばしたのは、この布教区の廃墟を見るためだった。

年版のなかで、アメリカ植民地独立の希望は、むしろ植民者たちが自ら開墾し、所有する土地に創設を宣言したばかりの北米合衆国に託されることになった。

夢のあとに思いをよせる

この改稿をどう理解するかは、齋藤晃編『宣教と適応』(名古屋大学出版会、二〇二〇年)所収の拙論に譲るとして、わたしは布教区の廃墟のなかで、これがユートピアでありえたかもしれない場所であることをしきりに思っていた。「集落」というには余りに大きな、矩形に区切られた街区の中心に置かれた聖堂の赤茶けた廃墟は、かつての威容を今に伝えている。その周囲に配され、整然と区切られた新信徒たちの住居はさながら二〇世紀の公園住宅や社宅街の先駆けのようだ。聖堂の傍らには墓場、裏手には宣教師たちが農業のための実験に使ったという植物園もある。しかし今やそのすべてが、南米の冬の青空の下、草に覆われていた。観光地化したサン・イグナシオ・ミニを除けば、サンタ・アナにもロレトにも訪れる人は少ない。なにより往時には数千人が住んだはずのどの布教区にも、もはや一人のグアラ二人もいない。一九世紀初頭の南米諸国の分裂・独立の途上でミシオネスが争奪の対象となったこと、やがて国家とともに到来した資本主義化の下で住民たちが労働者として大挙してこの地方を後にしたことが原因らしい。

夜、ポサダのホテルのバルコニーで煙草をくゆらせ、巴拉ナ川対岸のパラグアイの街の灯を見ながら、わたしは世が世ならここにニューヨークがあってもよかったのだ、と空想にふけていた。古い文献を読みすぎた学者の妄想だろうか。しかし異郷への旅は、わたしにはいつもそんなふうで、過去の文献に託された夢とそれを読むわたしの現在を相互に照らし合わせその合わせ鏡のなかで過去から現在を問い返すささやかなきっかけを与えてくれる。そんな旅にまた出かけることができるのはいつになるだろうか。

興味深い叙述の変化

二〇一四年から一八年にかけて、齋藤晃さんの指揮する民博の「近世カトリックの世界宣教と文化順応」共同研究班に誘われたときに、わたし喜んで参加を決めたのも、この機会に、自分が長年の研究対象としてきたギョーム・トマ・レナルとドニ・デイドロの共著、『両インド史』のパラグアイ・ミッションに関する叙述を正面から論じたいと思ったからだった。その叙述が、ちょうどミッション廃止直後の二七〇年初版から二〇年後の二七八年版まで、じつに興味深い変化を見ることが、かねてから気に掛かっていたのだ。

レナルは当初、このミッションをイエズス会士の賢明な「文明化」によって、宣教師たちの精神的導きのもとにグアラ二人たちが自治をおこない、共有財産制の下で規律正しく調和に満ちた共同生活を営むユートピアとして描いていた。それが現実なら、布教区廃止後、グアラ二人たちは宗主国に対してこの神権政と共有財産制の共同体を守るために立ち上がるだろう——レナルはそんな先住民独立の可能性さえ夢想していたのだ。しかしその二〇年後、蜂起が起こらなかったことを見届けたデイドロは、このユートピアの叙述を打ち消してしまう。曰く、所有権を知らないグアラ二人たちは、自由も物の交換のもたらす喜びも知らず、倦怠を覚えていたに違いない。文明化にあたっては自由を尊重すべきであり、平等によってそれを損なってはならないのだ……。こうして『両インド史』一七八〇



サンタ・アナの墓地跡 (2018年)